

中瀬 有紀



Three Women Occupying and Knitting at Occupy Wall Street in Zuccotti Park on November 8, 2011

ニューヨーク大学大学院でアーサー・ミラーの『みんな我が子』(原題『All My Sons』)の公演が行われ、私は照明デザインを担当しました。1947年初演のこの芝居は、第二次世界大戦で次男を亡くしたケラー家が直面する更なる悲劇を描いています。

設定は第二次世界大戦終戦二年半後のアメリカ、オハイオ州にあるケラー家の裏庭です。雲ひとつない日曜日の午前十時に一幕が開き、日が沈み薄暮となる二幕、そして明るい月光がふりそそぐ午前二時に三幕が閉じます。照明設計のために行った調査項目は、1900年から50年間の中西部郊外住宅地における家庭用照明器機、ポプラの木に囲まれた裏庭の日照状況、八月のオハイオ州における日没時間と薄明帯の光の変化などです。そしてなにより日本人である私は、アメリカにとって第二次世界大戦がどのような意味をもったかを知る必要がありました。

1929年から発生した世界恐慌により、1939年になってもアメリカの失業率は高いままでしたが、1941年に参戦した第二次世界大戦がアメリカ市民に仕事をもたらします。戦闘機生産数は幾登りに上がり、1944年には同盟国が使用する戦闘用武器の約

## 政治、経済、戦争、そして演劇

60%をアメリカ国内で生産し、それはアメリカ経済に活力をもたらすと共に勝利へ導いたと言われています。第二次世界大戦は多くのアメリカ市民にとってビジネスでした。

アーサー・ミラーは1930年代に政治的な演劇の影響を受け、戦時中はブルックリンの海軍敷地内ボイラー工場で働き、戦争がもたらす生産高を直に体験します。1946年の夏に『みんな我が子』を執筆し、初案は『The Sign of the Archer』(射手座の合図)という題名でした。執筆に際し、戦後のアメリカを見てミラーが言った言葉が、"OK, you won the war. But what kind of country do you want? What now?"(あなたは戦争に勝ちました。しかし今どんな国をあなたは求めますか? 今なにが起ころうとしているのでしょうか?)です。

『みんな我が子』は、戦争ビジネスで犯した罪(戦闘機製造における欠陥部品販売)の責任から逃げ続けた父親ジョーのピストル自殺と、その罪を責めた長男クリスの後悔で幕を閉じます。ジョーの自殺によるケラー家の傷は、二年半前に地球の裏側で行われた戦火がもたらした“What now?”の答えそのものであり、現在も私たちは同じ質問を問われています。